

茨城いのちの電話

つくば
029-855-1000
相談電話



水戸
029-255-1000
相談電話

第80号 2012年 8月



「つくば麦秋」

小林春樹「つくばね散歩」より

大切なことは
「今、私は生きてここにいる」
ということ
その事実感謝したい
人は過去を背負い
未来に向かって突き進む
でも「生きているのは今」
「今を生きてる」事実
みんな同じ
この今に、ベストをつくそう
（「禅語」が現代に生きる私達に伝えて
くれる意味を考えてみました。）



而今（じこん、にこん）

孤独感と孤立感、似て非なる二つの言葉を解き、最近耳にすることが多くなった「孤立」、特に「青年期」のそれについて社会学者の土井隆義先生にお書き頂きました。

煽られた孤立不安を鎮めるために … 2～4
水戸開局20周年記念コンサート報告 …… 5

ご支援ありがとうございます …… 6～7
公開講座／受信状況 …………… 8



煽られた孤立不安を 鎮めるために

土井 隆義

(社会学者・筑波大学人文社会系教員)

●青年期の孤独と孤立

「万有引力とは／ひき合う孤独の力である」、
「宇宙はひずんでいる／それ故みんなはもとめ合う」。谷川俊太郎の第一詩集、『二十億光年の孤独』（1952年）の一節です。ここには、時代性を超えた青年期の孤独が、その普遍性を帯びた真実が、みずみずしく透明感のある言葉で見事に表現されています。人は、もともと孤独になりうる存在だからこそ、また同時に、互いに惹きあう存在でもありうるのです。

そもそも青年期とは、誰もがみな強い孤独感をいただく季節です。一人で孤独と向き合うなかで、私たちは自己形成を重ね、徐々に大人になっていきます。孤独を味わったことのない人間は、自分が何者であるかを掴むこともできません。孤独な時空間は、私たちが自身と対面する大切な契機なのです。じっさい人間の創造力の多くは、これまで孤独な思索から生み出されてきました。

しかし現在の日本では、その孤独を味わう機会が青年期から奪われているように感じます。代わって彼らが味わっているのは孤立です。両者は同じもののようには錯覚しがちですが、じつは似て異なるものです。孤独の眼差しは自分を見据えており、自らが主体的に選び取ることもできますが、孤立の眼差しは他者を希求しており、自らが客体として追い込まれるものだからです。

これまで私たちは、自分のかけがえのなさ、そして他者のかけがえのなさも、孤独を経験するなかで実感してきました。しかし孤立の経験は、自分のかけがえのなさも、そして他者のかけがえのなさも、同時に蝕んでいくものです。では現代の日本の若者たちは、なぜ孤独を味わう機会を逸し、孤立感に強く苛まれるようになったのでしょうか。

●併存する満足と不安

「世界青年意識調査」の結果によると、1970年代以降、友人関係に対する日本の若者たちの満足度は右肩上がりが高まっています。「友人や仲間」といときに充実感を覚える」と回答した若者

は、1970年代には約50%だったのですが、2000年代には約75%に増えています。NHK放送文化研究所の「日本人の意識調査」でも、人間関係に満足を感じる人の割合は、1970年代以降、高年齢層ではほとんど変化がないのに対し、若年層では大幅に上昇しています。

「世界青年意識調査」では、「友人や仲間のことが悩みや心配」と考える若者の割合も調べているのですが、友人関係に対して充実感を覚える人の割合が上昇するにつれ、そこに悩みを見出す人の割合は下がっていました。満足度が上昇してきたのですから、そこに問題を感じる人が減ったのは当然でしょう。ところが、じつは1990年代に入ると、その傾向が反転し始めるのです。

同じような現象は、家族関係にも見られます。「家族といときに充実感を覚える」と回答した若者は、1970年代には約20%だったのですが、2000年代には約40%に増えています。しかし同時に、「家族のことが悩みや心配」と考える若者の割合も、1990年代までいったんは減少していたのに、その後は再び増加へ転じているのです。

この調査では「悩みや心配」としか尋ねていないので、その中身までは分かりません。しかし、友人関係や家族関係に不満を感じる人の割合が増えたのでないことは確かでしょう。なぜなら、満足度はずっと上昇し続けているのですから。では、反転して増えはじめた「悩みや心配」とは具体的に何でしょうか。それは、おそらく不安ではないでしょうか。先ほどの言葉を使えば、「孤立する」ことに対する不安が高まっているように思うのです。そう考えると、表面上は満足度の上昇と正反対の現象のように見えて、じつは互いに矛盾するものではないことが見えてくるからです。

●人間関係の規制緩和

私たちは、社会を近代化させていく過程で旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それらに縛られない多様な価値観を持つようになりました。その結果、地縁や血縁などの伝統的な共同体も、あるいは学校や職場のような社会的な団体も、かつ

て有していた強い拘束力を徐々に弱めていきました。また、たとえば結婚制度から解放されて自由恋愛が可能になったことにも象徴されるように、友人関係のような自発的に作り上げられる集団も、その自由度を段々と高めていきました。

過去を振り返ってみれば、同じ地域の住民だから、同じ親族の一員だから、同じ会社の社員だからといったように、社会的な枠組みに同じく属することが、かつては友人や仲間との関係を支える強力な基盤となっていたといえます。いいかえれば、私たちの人間関係は、その多くが社会的な制度に強く縛られていました。たとえば学校では、同じクラスの生徒なのだから友人でなければならぬとか、同じ部活の一員なのだから仲間でなければならぬとか、そういった規範的な圧力が少なからずありました。

もちろん、現在でも人間関係を作る最初のきっかけは当時と大して違っていません。しかし、その後の関係を維持していく上で、制度的な基盤が果たす役割は大幅に小さくなっています。同じく学校の例でいうなら、同じクラスの生徒だからといって、自分と気の合わない相手と無理して付き合う必要などないし、同じ部活の先輩だからといって、その意向に無理に合わせる必要もない。制度的な枠組みの拘束力が弱まって、そう考える若者たちが増えています。

このように、人間関係の自由度が増した結果、不本意な相手との関係に縛られることが減ってきたのですから、満足度が上昇してくるのも当然でしょう。しかし、それは同時に、じつは人々の不安を駆り立てるものでもあるのです。なぜなら、かつてのように制度的な枠組みが関係を拘束しなくなったということは、裏を返せば、制度的な枠組みが関係を保証してくれる基盤ではなくなったことも意味するからです。

●リスクと格差の拡大

自分が好まない相手との関係に無理に縛られることがないという事情は、当然ながら相手の側にもまた同様に当てはまります。関係が自由化すると、たとえ同じクラスの生徒でも、相手が自分と付き合いってくれる保証はどこにもなくなりますし、たとえ同じ部活の先輩でも、相手がいつも自分を守ってくれるとは限らなくなります。付き合い相手を自分が勝手に選択できる自由は、その相手から自分が選択してもらえないかもしれないリスクとつねにセットなのです。

たとえば雇用をめぐる規制緩和は、より良い職

場環境を求めて労働者が自由に転職できる環境を用意しました。しかし同時に、雇用主の都合でいつリストラの対象にされてもおかしくない状況も生み出しました。人間関係についても、それと同じことがいえます。制度的な枠組みが力を失ってくると、付き合いが自由になる一方で、かつてのような安定性をそこに期待することも難しくなってくるのです。

また視点を変えれば、かつて制度的な枠組みによって人間関係が縛られていた時代には、人々を取り巻く環境にそう大差がなかったともいえます。しかし、その拘束力が緩み、人間関係の基盤として機能しなくなると、個人の環境に大きな差異が生じるようになります。そして、人びとの間に生じた差異は、人間としての価値を測る物差しとして作動しはじめます。人間関係の幅広さこそがそれを決めるという感覚が広がっていくのです。

たとえば雇用をめぐる規制緩和は、より条件の良い職場に転職して大金を稼げる人間を生む一方、安定した職に就けずに日々の生活に苦しむ人間も生み出しました。貧富の格差の拡大です。それと同じく、人間関係の自由化も、場を盛り上げる能力に長けて対人関係を器用にこなせる人間と、そういった社交術に疎くて対人関係が不得手な人間との間に、かつて以上の大きな格差をもたらします。そして、それが人間としての格の違いであるかのように感じられるようになるのです。

リスクや格差と自由は、このように表裏一体の関係にあります。満足度の上昇とともに、いったん「悩みや心配」の対象ではなくなっていた人間関係が、再び悩みや心配の対象と感じられ始めたのは、おそらくこのような事情によるところが大きいでしょう。それが特に1990年代後半からだったのは、自由と自己責任を強調する米国発祥の新自由主義な考え方が、わが国ではこの時期に広く浸透していったからです。いずれにせよ、今日では、人間関係に否応なく縛られることへの「不満」に起因した「悩み」は減りましたが、それに代わって、不安定な関係による寄り添なさへの「不安」に起因した「心配」が増えているのです。

●一匹狼と一人ぼっち

近年、一人でいる人間には価値がないとみなす考えが社会的に広がるなかで、若者たちは人間関係から孤立することに対して大きな不安を抱え込むようになっていきます。そのため、たまたま一人にならざるをえなくなったとき、しばらく立ち止まってその孤独の味をじっくり噛みしめたり、自

分自身を振り返ってみたりするだけの余裕を持ちえなくなっています。その状況をただ否定的にとらえ、その境遇から少しでも早く抜け出そうと躍起にならざるをえなくなっています。

先ほど触れたNHK放送文化研究所の調査では、「充実した生活を送るために大切なもの」も問うていますが、その結果を見ると、1970年代の若年層では、「なごやかな付き合い」より「経済力」が大切と考える人のほうが多く、全体の6割から7割を占めていました。しかし、2000年代の若年層では、両者の順位が逆転して、「なごやかな付き合い」が大切と考える人が全体の6割から7割を占めるようになっていきます。現代の若者たちは、豊かな人間関係がなければ幸せな人生を送れないと思ひ込み、その獲得へ向けて日々駆り立てられるようになっているのです。

たしかに今日の日本では、たとえば30歳を過ぎて独身でも、世間から白い目で見られることはなくなり、またコンビニエンス・ストアなどが普及して、単身者でも生活しやすい社会になりました。しかし、そうやって人間関係の自由度が高い社会になったからこそ、つねに誰かとつながっていなければ安心できなくなってもいるのです。そして、もしそれができないと、自分は価値のない人間だと周囲から見られはしまいかと他者の視線に怯え、また自身でも、自分は価値のない人間ではないかと不安に慄くようになっているのです。その意味で、じつは今日は、一人で生きていくことがかつて以上に困難な時代なのです。

1960年代に地方から都会へ出てきた若者に対して行なわれた調査によると、彼らが抱えていた悩みの一位は、友人や仲間が見つからないことではなく、一人になれる時間や空間がないことでした。当時の若者は、現在の若者のように濃密な人間関係を希求していたのではなく、むしろ逆に、人間関係の濃密さを嫌悪していたのです。だから彼らにとって、一人で生きていける人間は、たとえば「一匹狼」という言葉に象徴されたように、文字通り憧れの的でした。それは、集団のしがらみからの解放を意味していました。

ところが、いまや一人でいる人間は、かつての「一匹狼」のようにカッコイイ人とはみなされなくなり、むしろ逆に「一人ぼっち」と蔑まれ、イタイ人と侮蔑されるまでになっています。人間関係の自由度は増したのに、そのなかで豊かな関係を築けないのは、個人的な能力や資質、魅力に問題があるとみなされがちだからです。たとえば近

年、フェイスブックやミクシィなどの交流サイトを駆使して絶えずつながりを保持しようとしたり、ツイッターでフォロワーの数を過剰に気にかけたりするのもそのためでしょう。

●いのちの電話の意義

このように眺めてくると、東日本大震災後、復興のスローガンのように唱えられた「日本はひとつ」、「つながろう日本」といった耳当たりのよい言葉には、じつは光と影の両面があることに気づきます。互いにつながって助け合うことは、たしかに素晴らしく尊いことに違いありません。しかし、いつもつながっていなければならないという圧力が、一人でいる人間を否定的に捉え、そのため若者たちから孤独を味わう余裕を奪い、逆に彼らの孤立感を煽っている面があることにも留意しておく必要があります。

そもそも国民に一致団結を求めるこれらの言葉は、みんなと違うことを悪とみなし、運命の共有を強要し、そこから外れて振るまう人間を断罪しかねない危険をはらんでいます。現実には、被害に遭ったか否かは偶然の産物ですし、だからこそ一律には推し量りえない代替不能な悲しみや苦しみがあるはずで、被災地の内にあっても、あるいはその外にあっても、生きることの困難は人によって千差万別のはずです。しかし、つながりを強要する圧力は、その本来の多様性を否定しかねない圧力へ転じる危険を秘めているのです。

このような点から考えてみると、しばらく前に流行したネット集団自殺も、孤立感を煽られた若者たちの叫び声として理解できるでしょう。リアルな人間関係が同質化の強い圧力を備えているがゆえに疎外感を強く刺激するのに対し、ネットでつながった関係はバーチャルであるがゆえに多様性を担保してくれるように感じられます。じつはそれは錯覚かもしれないのですが、少なくとも表面上はそこに純粹さを感じさせます。だから見知らぬ他人と連れ添っても疎外感を覚えることなく、一緒に死に向かうことができるのでしょう。

そうしてみると、ネットや電話をつうじた一時的な関係は、リアルにつながった関係ではないからこそ、一人でいることの自由を確保しつつ、人々の孤立感を癒す救いの場となりうるのかもしれませんが。そこで紡がれる関係は、日常の関係のようにつながりを強要することもなく、各自の多様性を保証しながら、それまで煽られてきた孤立感を鎮めてくれます。いのちの電話の意義も、まさにここにあるといえるのではないのでしょうか。

茨城いのちの電話水戸

開局 20 周年

記念コンサート

の報告



「茨城いのちの電話水戸」は、県北、水戸地区の相談員の負担を軽減するため、「茨城いのちの電話（つくば）」の分室として、1992年に開局し、お陰様で今年20年の節目を迎えることができました。水戸20周年記念事業として、7月8日（日）県総合福祉会館に於いて、式典とチャリティーコンサート～響き合ういのちといのち、いまあらたに～を開催いたしました。

当日は多数の方々にご来場いただき、式典では幡谷浩史理事長が、20年間大過なく活動が続けられたこと、それを支えて下さった多くの皆様への感謝の言葉を伝えました。



式典後、宗次郎オカリナコンサートが開演。ご自身が製作したうちの選りすぐりの中から、大小のオカリナを駆使して奏でられる澄んだ音色は、高く低く会場に響き渡り、聴く者の心をとらえました。しばし自然に抱かれていたような、こころの平安は、きっと明日からの活力になってくれることでしょう。

コンサート終了後、祝賀会が催され、この20年を支えて下さった懐かしい方々も大勢参加して、共に水戸20周年を祝いました。

第28期養成講座開講 !!



さる6月2日、第28期電話相談員の養成講座の開講式が行われ、31名（男9名、女22名）が約2年間の養成講座のスタートを切りました。“隣人として”の電話相談員の誕生を願っています。

相談員の養成講座は毎年6月に開講されています。詳細はホームページで公開していますので、関心をお持ちの方は、ぜひご覧ください。<http://www.iid.or.jp>



◆まつりつくば2012バザー

◆茨城木材相互市場バザー

◆土浦産業祭バザー

献品のお願い

お問い合わせ：茨城いのちの電話事務局

つくば ☎ 029-852-8505 (月～金 9:00～17:00)

水 戸 ☎ 029-244-4722 (月～金 13:00～17:00)

2012年度 自殺防止公開講座のお知らせ（厚生労働省自殺防止対策補助事業）

心のサインに気づく、つなげる 自殺予防の基礎知識



講 師 たかはし よしとも
高橋 祥友 氏

（筑波大学 医学医療系 災害精神支援学教授 医学博士・精神科医）

日 時 2012年12月1日(土) 14:00～16:00（開場13:30）

会 場 つくば国際会議場 エポカルつくば 中ホール200

定 員 200名（先着順）入場無料

申込み 電話・FAXで「茨城いのちの電話」事務局へお申込みください。

【つくば】TEL 029-852-8505 FAX 029-852-8355（平日9:00～17:00）

【水 戸】TEL/FAX 029-244-4722（平日13:00～17:00）

受信状況

1985年6月1日～2012年5月末現在

総受信件数
677,843件

うち当期受信件数
(2012年2月1日～2012年5月末現在)

7,819件
男 3,589件 女 4,230件

自殺予防 いのちの電話

0120-738-556

毎月10日24時間受付

<http://www.find-j.jp/>

（ 震災ダイヤル **0120-556-189** ）

毎月10日は除く 13時～20時受付

※岩手県、宮城県、福島県、茨城県にお住まいの相談窓口です。）

〈お知らせ〉

コラム「ことばtoこころ」は都合により休ませて頂きます。当コラムは、次号からさまざまな分野の方々からご寄稿頂き、新たな装いでお目にかかりたいと思っております。

〈編集後記〉

9年間勤めた職場を3月で辞め、4月から新しい仕事に就いた。年金を満額もらえる年齢に達しても新しい職場では新人である。上司や先輩は文字通り、年長者で、しかも、全員がこれまでの仕事をリタイアしてきた人というかなり変わった職場に勤めている。数ヶ月が経過して、仕事にも慣れたが何かが足りないと感じていたとき、あのサミュエル・ウルマンの「青春の詩」に接した。青春とは人生のある期間をさすわけではなく、心の様相を指すということばは然りである。「優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心」を持ちたいと思った。（K.M.）

社会福祉法人
茨城いのちの電話

発行人 幡谷 浩史

事務局 〒305-8691 茨城県筑波学園郵便局私書箱60号

ホームページ <http://www.iid.or.jp>

編集 茨城いのちの電話広報委員会

TEL **029-852-8505**

FAX **029-852-8355**

再生紙を使用しています

この広報紙は、共同募金からの配分金で作りました。

